



船旅と社交ダンスの良い関係：  
ゴージャス&ロマンチックへの憧れ

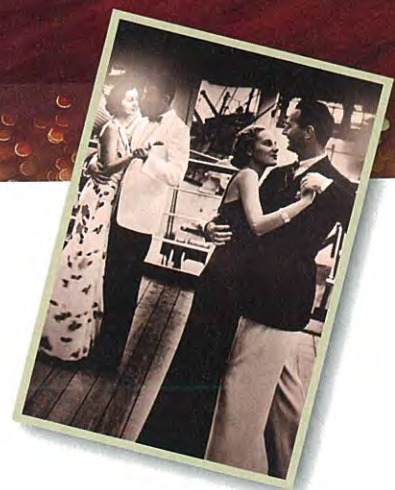
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15378">http://hdl.handle.net/10466/15378</a>



## 船旅と社交ダンスの良い関係



ゴージャス  
&  
ロマンチック  
への憧れ



大阪府立大学 教授 堀江 珠喜

## 古き良きライナーとダンス

西洋映画でかつての豪華客船（ライナー）が舞台になる時、必ずといっていいほど社交ダンスの場面がある。欧米の富豪たちがフォーマルな装いで集う一等客専用ラウンジでのそのようなひとときは、ゴージャスでロマンチックだ。いかにも高等遊民、有閑階級らしい優雅さがうかがえる。実のところ、まだクルーズ経験のない現代日本の一般女性たちは船旅に、かかる「ゴージャス&ロマンチック」な夢を抱いている。だからこそ「いつか自分も」との希望につながり得るのである。そもそも「ゴージャス&ロマンチック」は、女性の永遠の憧れなのだ。

ライナーにおけるこのようなダンスは決して特別なイベントではなく、ディナー後のちょっとした社交的娯楽であった。

それで喉が渇けば冷たいカクテルを注文し、さらにお腹が空けば夜食をとる。なにしろライナーは寄港観光を主目的にしたクルーズ船とは違うので、乗客もエクスカージョンで疲れ切って、（あるいは翌朝早い出発のエクスカージョンのために）早寝するという事態は起こらない。

船内で楽しめることこそライナーの王道であり、ダンスはその一つの間隙だったのだ。そのようにダンスを楽しむ人々の写真は、サウサンプトンの QE II ターミナルなどに飾られ、古き良き時代のイメージを現代のクルーズに重ねようとしているかのようだ。

写真左 QV に飾られているダグラス・フェアバンクスの写真  
写真右 サウサンプトン QE II ターミナルに飾られている写真  
中央は QV のダンスフロア



## 社交ダンスのイメージを 利用するクルーズ船

ライナーにおける「ゴージャス&ロマンチック」な社交ダンスのイメージはプラス効果として、現代のクルーズ船の宣伝にも取り入れられている。洋上で最大のダンスフロアを持つクイーン・メリー2をはじめキュナード船は、ライナーの伝統を受け継いでいるというスタンスもあり、クイーンズルームでのゴージャスなダンスシーンを用いておしゃれな大人の雰囲気アピールすることが多い。(日本の某旅行社が2014年始めに首都圏で配布したホーランドアメリカのチラシでは、なんとこのQM2のクイーンズルームの写真が掲載されていた。それほど魅力的なホールなのだ。)

また2014年のプリンセスクルーズのパフレットでは、日本発着において特にダンスレッスン時間を設けたというお知らせとともに、乗客が踊るロマンチックなイメージ写真を掲載している。さらに最近の飛鳥IIやにっぽん丸のパフレットでもダンスが楽しめることを強調する傾向にある。

とりわけ飛鳥IIは、ダンス目的のリピーター女性客が多いと聞く。船側もダンスファンの取り込みを狙っているようで、2014年8月には福岡のホテルで2度、飛鳥IIが疑似体験できる「ダンスクルーズナイト」を開催したらしい。

## 船上ダンスの魅力

～ヘタでもOK!正式でなくてもOK!～

では陸上に比べて船上のダンスの魅力とはなんだろう。これはあくまで外国船についてであるが、「ヘタでもOK!正式でなくてもOK!」という点であろう。陸のたとえばホテルのダンスパーティやダンスホールでは、一応は踊ることを目的として出かけて行く者が多い。そこで上手なダンサーを目の当たりにするとヘタな者は踊りにくかろう。しかし船上でのダンスパーティは、あくまで船内社交生活の一部であり、踊るのと同じくらい社交を楽しむ機会なのだ。

また陸上とは異なり、揺れるし、スペースもキュナード以外は決して大きくない。そんなところで正式に踊ると傍迷惑だ。正式でなくてもOKどころか、現場対応で歩幅を小さく、手を伸ばすにしても方向を変える必要もあるのだ。

昼間のダンスレッスンに参加すると、上手な客などほとんどいないことがわかって安心するだろう。外国船の欧米人インストラクターは、日本人教師のように、超初心者に対して、小煩いことを言わないのが良い。どうも生真面目な日本人教師はきちんと教えなければと、あれこれと一度に多くのことを指導しすぎるきらいがあるのだ。たとえば一歩前進にしても、踵か足先のいずれをまず床につける

かまで、高齢の超初心者に注意したりする。

だが船上のダンスレッスンで学んでプロを目指す受講者など絶対にはない。ましてやシニア客にとっては、歩けるだけまだまして、船上には車椅子の乗客もいれば杖をつく客は数知れずだったりするのだ。たとえ歩けても膝や腰に不具合を訴える者も少なくないだろう。とりわけ高齢者の乗船割合が高いと思われるクルーズ船では、インストラクターは、極端にいえば老人ホームで教えるくらいのつもりで乗客に接するべきである。(陸でなら教え方が悪いとすぐに辞めさせ、より好ましい教師をすぐ選ぶことも可能だ。事実、私の母が入居していた老人ホームでは、高齢者に対する教え方がわかっていないとインストラクターを交代させた。船上ではそうもゆくまい。客も短期間しか滞在せず、船側もどうせダンス未経験のスタッフがイベントを担当し、インストラクターに何も注文できないに違いない。)ともかく、あくまでお遊びダンスなのだから、その夜に実践して楽しめるレベルで、教えるべきなのだ。

キュナードでは女性客のために数人の「ジェントルマン・ダンスホスト」がいる。資格は45歳以上の独身で、英語とダンスができる紳士ということだが、ダンスの上手な

QVのダンスレッスン





者は少ない。それは高齢の女性客が多いため、ダンスが巧いことを鼻にかけて、相手を振り回すように派手な(骨折させかねないような)踊り方をするようなホストよりも、歩くだけのようなおとなしいステップのほうが、その雰囲気では好ましいのだ。そのためサンバ、ウィンナ・ワルツ、果てはタンゴの踊れない英国人ホストまでいたりする。

いっぽうアメリカ人ホストは略式が得意で、「アメリカン・ワルツ」や「アメリカン・タンゴ」、つまりは曲に合わせて歩くだけのダンスで堂々と女性をリードしたりする。これだと周囲とぶつかることも少ない。しかし彼らは皆、高齢女性との踊り方は心得ている。たとえ日常生活では杖を手放せないシニア女性でも、抱きかかえるようにしてゆっくりと静かに踊り、楽しませるのである。もちろんダンス中、杖は不要である。ダンスホストが安全安心な杖となってくれるのだ。

何事にも「正式」が好きな日本人だが、船上、とくに外国船では「郷にいれば郷に従え」の通り、欧米人ふうにしレディファーストはもとより、ダンスも(競技のように見せるためではなく)欧米客のように皆で楽しむように踊るべきである。迷惑な競技ダンスふうの動きよりも、歩くだけのダンスのほうがクルーズには適しているのだ。クルー

ズでは、歩くだけでダンスパーティデビューできる。事実、2011年のQM2ワールドクルーズの第6区間ドバイ~サウサンプトンでは、そのような状態から始めて、英国に到着する2日前のパーティではそれなりに踊れるようになったベトナム系米人夫婦がいた。陸では超初心者が毎晩踊りに行くことなどまずありえまいが、船上では夜のダンスが日課にもなりうるので上達も早いと思われる。



QM2のダンスホスト

## 踊れなくても楽しめる キュナードのボール

~和服はNGかも?~

キュナードのテーマボールについては、すでに本学会誌でも述べたが、ここでは服装ではなく、社交ダンスを知らない方でも楽しめる催し物について述べたい。

まず、キュナードでは最初のフォーマルナイトは、ブラック&ホワイトの服装を奨励されるのだが、このパーティで必ず行われるのが「ガヴォット」である。(16世紀のフランス宮廷でも同じ振り付けだったかどうかは知る由もないが、キュナードではこのフォークダンスのような踊りを「ガヴォット」と呼んでいる。)

普通のダンスは男女がペアになるが、「ガヴォット」では女性2人の間に男性1名が入って両方の女性の手を取る。これが一組で、各組が1列に並んで大きな輪を作る。この体勢から音楽に合わせて、全員が8歩前進、8歩後退、男性が右腕を上げて右の女性を一回転させた後、左手を上げて左の女性を一回転させ、次に右の女性の頬にキス、左の女性の頬にキス、両手を離して男性だけが前進し、前の二人の女性の間に入って手を取る。そして最初の8歩前進というふうと同じ動作を繰り返すのだ。大多数の参加者がこの要領を会得した頃、音楽はどんどん早くなり、皆が大慌てしながら笑いが生まれて終了時にはとても和やかな雰囲気になる。

単純な動きなのですぐに覚えられるし、英語がわからずとも見よう見まねで動ける。間違えても構わない。むしろ間違えたほうが、にこやかなムードを演出できるくらいだ。概して日本人は「間違えたら恥ずかしい、笑われたらみっともない」と消極的になりがちだが、そんな心配は無用である。







QM2 でのガヴォット(左) QV でのフォークダンスのような踊り(右)

ただし日本人には「キス」に抵抗があるかもしれない。欧米人と親しく接していれば、挨拶時に頬にキスはむしろ当たり前だが、キューナードでも、一度だけ、「キス」ではなく「目を見て微笑みかける」とエンターテインメントスタッフが説明したことがあった。しかし、それでもキューナードのリピーターたちは以前のクルーズで学んだ通りにキスを始め、結局ヴォットの終わり頃には皆がキスをするようになった。

「キス」といっても、全くの初対面の相手なので、「チュ」と音をたててキスをするふりをして接触しない紳士もいれば、蛸?のように吸い付いて来るような積極派もいる。だがそれでも、全然不潔な、あるいは嫌らしい感じはしない。そのような挨拶に慣れている欧米人だからということもあろうが、やはりタキシード姿の男性は礼儀正しいという印象を与えるからではあるまいか。また女性のほうもイヴニングドレスという非日常的な服装で、気分も高揚しているため抵抗感も薄いと思われる。いずれにせよガヴォットが、最初のフォーマルナイト(乗船の翌日または翌々日)、つまりクルーズの初めの頃にあるので、ここで他客たちと親しくなるのに良い機会となる。しかしよほど着慣れていないと、和服では参加しにくいだろう。

2014年のQVでは、クルーズの中程と終わり近いボールで、ガヴォットとは異なった、もう少しだけ難しく運動量も多い、やはりフォークダンスのように輪になって相手を変えて行く踊りが、バンドの休憩中に行われた。こちらは男女一組で手をつなぎ男性は輪の内側、女性は外側で4歩前進、4歩後退、手を離して男性は内側へ、女性は外側へ4歩、次に男性は斜め外前、女性は斜め内後ろに4歩で進んでパートナーチェンジ。新しいパートナーとホールドして進行方向へ4歩シャッセ、逆方向へ4歩シャッセ、8歩で1回転して男性内側、女性外側に並んで手をつなぎ、最初の動作に戻る。これも社交ダンスのステップとは全く無関係で、歩ければ参加できる。また半数くらいがすでに知っているようだったので、わからなくても踊っている途中でも周囲の客たちからリードや助言してもらえる。これは「恥」ではなく「社交」であり「お楽しみ」なのである。ときにはバンドの休憩中にゲームが行われることもある。

最も簡単なのはフロアに出て立っているだけ。スパークリングワインボトルを持ったスタッフが、目隠ししたソーシャルホステスの命令通りに動き回る。そして最後に立ち止まった所の前に、誰か参加客がいれば、この客がスパークリングワインをもらえるというもので、英語は必要ない。

英語が必要なのは、クイズである。

参加者はフロアに集まる。答えは4択で、フロアの4隅が各答えの支持者の行き先となる。間違えばそれでフロアから退場となり、次の質問に移る。2012年のクリスマスにこれが開催されたとき、最後に残って賞品をもらった十代の長身男性は、次の日からクルーズの終わりまで姿を見せなかった。たぶん船内で流行していたノロウイルスに感染・発病したものと推測される。我々は第一問で間違い、早々に退却したため彼と接触する機会が減る結果となり、むしろ幸いだったかもしれない。

こんなノロウイルス患者が増え、船内が消毒で大騒ぎをしていたときですら、ボールは続けられたし、大晦日にパーティでは、知らない者同士がカウントダウン直後に「ハッピーニューイヤー!」とハグし合った。さらにクルーズ終盤のパーティでは、椅子取りゲームをアレンジしたお遊びもあった。参加者は全員女性。フロア中央では男性10名ほどが外向きに輪になって立つ。音楽に合わせて女性が男性の周りを歩き、音楽停止とともに、近い男性に抱きつくのである。あぶれた女性は失格となり、男性の数を減らしてまた同じことを繰り返す。最後に男性2名を女性4名が取り合うことになったが勝負がつかず、この6名がスパークリングワインボトルの賞品をもらった。考えてみれば随分大胆なゲームだが、これもフォーマルナイトでタキシードとイヴニングドレスという優雅な衣装のおかげで、いやらしさを感じさせなかったのではないだろうか。また推測するに、このゲームで男女を入れ替える、すなわち男性が女性に抱きつくというのでは、セクハラの問題が心配されるのではあるまいか。

ちなみに私はラスト4名に残り、賞品をもらった。実はこのゲームのコツは、歩きながら近くの男性とアイコンタクトし、音楽が止まるやこちらに体と腕を向けさせることであ

QM2 でのクイズ仲間(この写真撮影直後に敗退)





る。英語ができなくても参加できるが、和服ではすぐに敗退することになるだろう。

## 「ティ・ダンス」古き良き伝統

キュナードでは、エンターテインメント・ディレクターが英国伝統の尊重派なら、週に1回、大西洋横断では2回の割合で、アフタヌーンティの時間にティ・ダンスが催される。ティ・ダンスの長所は、午後のお茶の時間に催されるので夜に比べればはるかに健全だし、カジュアルな服装で参加できる。アフタヌーンティとケーキ、スコーン、サンドイッチが出されるが、シャンパンなども追加料金を注文は可能である。航海日に設定させるので、ちょっとした運動にもなっている。

初対面の客と相席になることもある。大西洋横断QM2



でドイツ人神学生とその母親は、我々夫婦のテーブルに案内され、我々が日本人だとわかり大変喜んでい

た。聞けば「英

米人はドイツ人



QVのティ・ダンス(上)  
上海、和平飯店のティ・ダンス(下)

を嫌うから」と呉越同舟のクルーズにおける複雑な国際事情が伺えたが、この神学生は私とウィнна・ワルツを踊る機会を得て、さらに嬉しそうであった。ティ・ダンスが社交の場であることを再認識した次第である。

英国の地方都市では、ティ・ダンスの人気が高まっているらしい。ロンドンでは10年ほど前まではサヴォイホテルやウォールドルフホテルで週末に、ティ・ダンスが催されていた。だが今ではウォールドルフが、月に1度だけ開いているようだ。

私を知る限り、現在でも毎週ティ・ダンスが楽しめるのは、上海の老舗ホテル、和平飯店だけである。毎土曜日3時～6時で、飲み放題シャンパン付きのアフタヌーンティ



ウォールドルフのパームコート

セット、またはカクテル一杯とアフタヌーンティセットのいずれかを選ぶシステムである。後者の安いほうでも日本円に換算すると1人前6千円余りと、贅沢な週末のひとつきとなるが、地元客でラウンジは満席である。

女性客のためにダンスホストがいるのはキュナードと同じだが、こちらは若い中国人男性だ。だがとても広いというわけではないフロアのスペースと女性客のテクニクレベルに合わせ、決して派手に踊ることがなく好感がもてた。日本の基準からすると「正式」ではなく、ホールドして歩くだけという感じだったが、それがグローバル・スタンダードなのであって、ティ・ダンスで競技ダンスの振り付けで踊るほうが変なのだ。

ここでも、ウィнна・ワルツになると熟年の恰幅の良い地元客紳士が、私を誘いに来た。相手は英語が話せず、私の中国語は「我是日本人」レベルだが、ダンスによって社交のひとつきを楽しめたのである。私としては、このティ・ダンスだけのために上海を再訪してもいいと思っている。

いずれにせよ、それほどに陸では開催されることの少なくなったティ・ダンスがクルーズ中に楽しめるなら、優雅な船上ライフをアピールするイベントとなるだろう。

## 小さなスペースでもOK!

### 重要なのは音楽

和平飯店のティ・ダンスでは、バンド演奏が入り、ラウンジ横の大理石フロアスペース上にダンス用の木の床が特設される。日本のホテルがダンスパーティを催すときにも、カーペットの上に木の床が設置される。もちろんこのような配慮は踊る側としては嬉しいのだが、社交ダンスのスペースや床に関して、欧米では一流ホテルでも結構いい加減である。

たとえば前述のウォールドルフは、パームコートがティ・ダンスの名所だったし今でもその伝統は細々と続いている





リッツ・ロンドンのレストラン(中央奥に小さなダンススペース)

ということだが、バンド演奏は入るものの、床は大理石で、スペースも競技ダンスのように派手に踊るなら4カップルが限度という広さだ。

さらに狭いのは、ウォールドルフより格上のホテル、リッツ・ロンドンのレストランだ。ここでは今でも毎週末にディナー・ダンスが催される。だが大理石の床で派手な踊りなら2組用くらいの広さだ。しかも大晦日夜7時から1時過ぎには、ここでカウントダウン・ディナー・ダンスが行われる。シャンパン付きディナーは我々が出席した2009年末で一人千ポンド(日本円にして約17万円だが税・サービスとワイン代は別なので、一人20万円の覚悟は必要、もちろん宿泊費は別)と高額だったが、毎年の常連も多いようで賑わっていた。それは客が金額に見合う内容と納得しているからだ。クルーズについても同様のことが言えるが、なにも安ければいいというものではない。高い料金でも、それなりの感動を与えてくれるなら、客は喜んで払うのである。(私もまた参加したいとは思いますが、費用ではなくロンドンの冬の寒さと空港の混雑を考えて二の足を踏んでしまっている。)

ゴージャス&ロマンティックなカップル  
(小さく踊っている)



このパーティでは照明は特設されるが、ダンス用の床が設置されるわけではなく、相変わらず狭いスペースで踊るのである。それでも不満が出ないのは、皆がそのような小さく踊るためである。残念ながら、このパーティでは写真撮影禁止だったので、ダンスの様子を視覚的に伝えられないが、2014年のQVで、70歳代の



踊りたくなる音楽の時(上) 踊れない音楽の時(下) どちらもQV



ゴージャスな米人カップルが、50センチ平方内で踊り、ロマンチックな雰囲気醸し出していたので紹介する。このようなダンスなら、狭いスペースでも大丈夫なのだ。

日本の場合、風営法の縛りだけではなく、社交ダンスには広いスペースが必要と思ひ込み、踊る機会を減らしているのではあるまいか。だが本当に必要なのは、スペースではなく、ダンスに向けた音楽なのだ。

キューナードは、確かに洋上としては広いダンスフロアを備えクイーンズルーム・オーケストラなる寄せ集め音楽家集団を抱えているが、乗船翌日に、私はエンターテインメント・ディレクターにダンス音楽について苦情の手紙をしたためることが何度もあった。バンドマスターや歌手にダンスの心得があればいいのだが、そうでなければワルツでもテンポが速過ぎたり遅すぎたりで踊れない。また昼間のエクスカッションで客が疲れているときに、ジャイヴ、サンバ、ウィンナ・ワルツなど速い曲を続けるのも、まったく無神経である。

さらにバンドの休憩時間に流されるCD音楽も、社交ダンスをまったく知らないエンターテインメントスタッフが選ぶと、踊れない。つまり、音楽が悪いと、せっかくの広いダンスフロアが、誰もいない状態になる。最近のキューナードでは、このような事態が頻繁に起こり、プラチナメンバー(過去に7回以上の乗船したリピーター)の私だが、嫌気が差し、しばらくは乗船する気になれないのである。

その点、ホーランドアメリカのダンススペースは決して広いわけではないが、2011年のオステルダムも2012年のアムステルダムも、4名のバンドが社交ダンスのできる音楽を毎夜、演奏してくれた。キューナードのようなゴージャスなテーマボールはないが、ロマンチックな大人のダンスタイムなら、ホーランドアメリカで充分だし、ミュージシャ





オステルダムダンスフロア

ンとしてのレベルはキュナードより上である。

さらに狭いのは、ハワイクルーズのプライド・オヴ・アメリカのシャンパンラウンジ、ピンクスに設けられた直径 3.5メートルの円形フロアだ。このノルウェージャンは、英国の伝統を誇るという触れ込みのキュナードとは大違いのアメリカンな船なので、社交ダンスを重要視していないが、しかしそれでも、3～4名からなるバンドは、キュナードのクイーンズルーム・オーケストラより、はるかにダンス音楽のセンスに恵まれていたし、短いながら2回の社交ダンスタイムが一週間クルーズで設けられた。

## 社交ダンスに魅せられて クルーズ

一人旅の男性も、ダンスができれば自由に女性をフロアへ誘うことができる。残念ながら、そのような男性の数は少ないが、2009年春のQM2大西洋横断東行きクルーズで、毎晩踊りに来た高齢男性がいて、私ともよく踊った。飛行機が嫌いとは聞かなかったが、ダンスの楽しみがあれば寄港地なしの1週間クルーズも退屈しまい。まさにライナーの楽しみ方である。その頃はクイーンズルーム・オーケストラの演奏もまだ良かったのだ。

現在、キュナードの最多宿泊記録保持者は、3000夜を超えたニューヨーク在住のバーンスタイン夫人だが、彼女もまたダンスフロアの常連である。2012年のロサンゼルス～ニューヨーク QV クルーズで一緒だったが、おそらく彼女は船上でダンスホストと踊る楽しみを知り、キュナードに乗り続けているものと推測する。私を知る限り、外国船でダンスホストを用意しているのはキュナードだけだからだ。彼女のクルーズ記録は年鑑「キュナード」によって知ることができるが、フライ&クルーズよりもニューヨーク発着を好むようで、従って行き先は限られる。寄港地観光よりも、むしろ船内ダンスが目的で、そのため私を知る限りキュナード三隻のうちでもっともダンス音楽のひどいQEを、地中海クルーズが多いこともあって、彼女は敬遠しているのではあるまいか。

日本の飛鳥IIは、前述のようにダンス好きの女性客を魅了しているようだ。にっぽん丸でもダンスタイムはあるが、

その時間が短くさらにディスコが多いとの不満の声を聞いたことがある。パシフィックヴィーナスについては、私が乗船したのは某旅行代理店によりチャータークルーズだったので、ふだんはどうかかわからない。パシフィックヴィーナスは現在の日本の三隻のなかでは、もっとも踊りやすいフロアに思えるが、もちろん重要なのは音楽である。

ただし日本船の場合、超初心者が勇気を出してフロアに立ちにくい雰囲気があるのは、残念だ。陸のダンス教室で授業料を払って学びクルーズの準備をしてきた客が張り切る気持ちは理解できる。だが、クルーズで歩くだけのダンスでも、その楽しさを知り、一念発起して陸でのレッスンを少しでも受け、またクルーズで踊って感動し、という具合に船旅のリピーターを増やすことも考えられるのだ。もちろん船上でもダンスレッスンはあるが、これも、超初心者向けに「歩ければ踊れる」レベルでフロアへの参加を促すべきであろう。その際、インストラクターにはレッスンの目的が、ダンスの上達ではなく、超初心者にダンスらしき動きを楽しんでもらいクルーズのリピーターになってもらうことと、心得させねばなるまい。

現代は、「モノよりも感動を売る時」代といわれている。まさに高級船のクルーズ乗客は、豊かな中高年購買層だが、すでに欲しいものは入手しており、だからこそ旅行という贅沢に高額の参加費用を払うのである。カクテルを作るロボットも結構だが、その酒を飲むために果たして何度も乗船してくれるだろうか。中高年客にロッククライミングもきつそうである。

いっぽう冒頭で述べたように「ゴージャス&ロマンチック」は女性の永遠の憧れである。だからこそシンデレラ物語は、いつの時代も形をかえて提供され、人気を博するのだ。シンデレラは舞踏会で王子様と出会う。社交ダンスには、そのようなイメージが託される。ゴージャスな船旅でのダンスシーンには、ロマンチックな踊りが似合う。それはフラダンスでも盆踊りでもなく、豪華ライナー時代からの伝統的社交ダンスであり、これに魅せられた乗客はまたその船に戻ってきたいくなるはずなのである。つまり船旅と社交ダンスは、ライナー時代に良い関係にあったわけだが、まさに温故知新で、現代のプレミアム船以上のクルーズでは、裕福な中高年客の取り込みに、社交ダンスの魅力を利用することを真剣に検討されるべきと考えるのである。

※本稿は2014年11月22日、日本クルーズ&フェリー学会での講演「クルーズと社交ダンスの良い関係」をもとに加筆したものである。

